

国際生物多様性年記念講演会

『南の島のいきもの保全 ～奄美、屋久島、日本の自然～』

1. 日 時：平成 22 年 7 月 2 日（金） 18 時 45 分～20 時 45 分
2. 場 所：ウインク愛知 1101 中会議室 A
3. 講 師：小野寺 浩氏（鹿児島大学学長補佐、元環境省自然環境局長）
4. 概 要：

《講演概要》

自然の風景に対する日本人の認識

- ・ 良い風景、良い自然に対する人々の認識は変化していくものである。
- ・ 富士山は古くから日本人が良い風景としてきたもので、現在もその評価は変わらない。
- ・ 上高地の河童橋から眺める穂高連山の風景は、明治期にイギリス人のウエストンが評価するまでは、日本人の評価はそれほどでもなく、近代になって新たに発見されたといえる。
- ・ 釧路湿原は昭和 62 年に国立公園に指定されるまでは、知る人ぞ知るものであった。湿原だけで 2 万[㊦]の面積であるが、農地にも住宅地にもならない土地で、しかも平らな風景はそれまで評価されなかった。しかし、国立公園の指定とともに、タンチョウやイトウなどの生息場所として評価され、高々 20 年位前に良い風景、良い自然と認識された地域である。
- ・ 屋久島は最も新しく認識された風景である。世界自然遺産の象徴でもある縄文杉は、実は昭和 41 年に南日本新聞の元旦のトップ記事で紹介された。その時のコピーが「縄文の春」であり、それで縄文杉という名前が定着した。縄文杉は独特の樹形で幹がうねったような姿をしており、樹齢ははっきりしない。こうした風景は最も新しく評価されたものであろう。
- ・ 阿蘇の外輪山は直径 20 km、標高約 1,000m の地域である。一面のススキ草原であるが、年間降雨量は 2,500～3,000 mm で、人間が介入しなければ森林に移行する。しかし、牛の放牧のため、年に 1 度、約 1 万[㊦]の規模で山焼きが行われ、草原の状態が維持されている。このような二次的な自然は間伐や薪炭材の採取、下刈りなど人間の柔らかい干渉を百年単位で繰り返して植生が遷移する中間段階で安定しているものである。阿蘇の草原はそれを単純化、純粋化した環境であるといえる。阿蘇では平安時代から山焼きを行っていると言われるほど、古くから人が関わってきた。そうした干渉の結果、ヒゴタイ、ハナシノブ、ある種のチョウなどが維持されている。里山や草原は独特の生態系を維持しており、干渉をやめてしまうと消滅してしまう、これも新しく認識された風景である。

日本の自然環境の現状

- ・ 日本の自然環境を植生自然度から見ると、自然林・自然草原は国土面積のほぼ 2 割を占め、残りの 8 割は人の関与を受けたものである。自然林・自然草原が 2 割しか残っていないと見るか、まだ 2 割残っていると見るかの評価は難しいが、国土の 4 分の 3 は人が干渉して成立している。一方、自然を排除した都市は 5 % しかないともいえる。
- ・ 2 割の手つかずの自然をどう保全するかということが重要である一方、生物多様性を考える上で国土の 4 分の 3 を占める人が干渉した自然をどうするかが大きな課題である。このうち、人工林は 4 分の 1 で約 1,000 万[㊦]。人工林は終戦直後には 500 万[㊦]であったので戦後、面積

は2倍になったが、そのほとんどはスギである。

- ・ 他方、国土の2割を占める自然林の面積は昭和50年代からほとんど変わっていない。
- ・ それでは日本の自然の特徴とは何か。四季の変化があること、生物の種数が多いことなどが挙げられる。しかし、種数について見ると、熱帯地域の何分の一であり、インドネシアより種数、個体数ともに少ない。そうすると、日本の自然の特徴とは、南北の緯度差が大きいということ、降雨が多いということ、火山列島であること、森林率が高いということ、固有種が多いということである。
- ・ 森林率は67%を占め、世界の平均が30%といわれているのできわめて特異である。
- ・ 固有種が多いということについては、かつての大陸との繋がりが関係している。
- ・ 日本は、約150万年前には大陸と繋がっており、その後の海面上昇により中国大陸で生息していたウサギが奄美に取り残され、アマミノクロウサギという固有種となった。
- ・ 奄美群島には、朝鮮半島やシベリア半島との共通の動植物種が30~40%あると言われており、2万年前には奄美群島は島嶼になったが、それまでに朝鮮半島やシベリア半島から多くの動植物種が日本に渡ってきたと考えられる。
- ・ 明治以降、特に戦後50年間の人による自然へのインパクトが大きく、多くの動植物種の絶滅の危機にさらされている。そのことを象徴するのが干潟面積であり、戦後約4割が消滅した。残された干潟の6割は有明海周辺の干潟である。干潟は大きなものが残っていれば良いというのではなく、規模の小さなものも含めて散らばって残されていることが生物の生息上、重要であるといわれている。このことを考えると4割の干潟が消滅したことは数字の上でも大変なことであるが、生態系の観点から非常に深刻な事態を招いていることが危惧される。
- ・ 浅海域では昭和40年代から埋立て面積が増加し、全国で干潟や自然海岸が消失している。この他、原野面積は大正時代から約100年で10分の1に減少した。また、日本の農村には茅場があって集落周辺にはこうした草場が維持されていた。放牧も少なくなってきた。例えば雲仙でもかつてはススキ草原であったとされているが現在では森林になっている。
- ・ このような国土の改変が進んできたのは昭和40年代がピークであり、ヨーロッパで200年かけて進んできたことを日本は20年でやってきたと言える。つまり国土の改変が速くて国土が混乱している。農地の都市的土地利用への転換も実質経済成長率との相関関係が見られる。このことを自然側からみると、自然林・自然草原が2割になっていることに現れている。
- ・ 絶滅危惧種も増加している。日本に生息・生育する野生動植物の2割が絶滅危惧種と言われている。
- ・ 例えば江戸時代中期に全国各地に生息していたとされるトキは130~140年で遂に最後の一羽がいなくなった。

生物多様性保全の意味、役割について

- ・ 日本の50年後を予測すると、まず人口は1億人を切ることが想定されている。
- ・ 将来、人口が減少する中で、車や電気製品など概ね欲しいものは身の周りに整ってきており、便利さとともに感じのいい環境があったほうが良い、或いは自然のセオリーのなかで当然あるものがあって良い、などのコンセンサス、つまり成熟社会の豊かな環境への必然的要請が得られるのではないか。

- ・ また、戦後の乱開発の影響で激変してきた国土の変化を緩和するため、また安全で効率的な国土経営・管理のためにも、自然のセオリーの中で自然の論理を活かして生活を立て直す時期に差し掛かってきたのではないかと思われる。
- ・ さらに公共事業も質的な転換を要請されており、新たな内需喚起策なども含めて見直す時期にきている。

国土の再編・自然の再生に向けて

- ・ オジロウシやツシマヤマネコなど日本には希少な固有種が残されている。
- ・ 一方、昭和 30 年代前半には都市人口が郡部人口を超えて、東京圏の人口が 10% を越え、現在では 27% になっている。これは先進国でも最も多い数字ではないかと思う。つまり東京一極集中という歴史的にみて初めての時代に突入した。
- ・ 改変した場所はもうどうしようもないのか。明治神宮の場所はもともと荒地地だったが、東京大学の本多静六教授が植栽計画を考え、大正 5 年に 70 畝の規模で 12 万本の献木を植栽したことにより現在では鬱蒼とした照葉樹林になっている。明治神宮は都市の中でも 50 年で自然を再生できるモデルである。
- ・ 愛知県を見ると、自然林や自然草原は約 1%、市街地が約 20%、自然海岸が約 6% と開発がとりわけ進んだ地域であると言える。その中で、二次林が約 13% あり、これをどうするかが課題であろう。
- ・ 日本の二次林は大きく 4 つのタイプに分かれるが、このうち、愛知県はコナラ林・アカマツ林地帯で、その再生には人の手が必要とされている。二次的自然環境はいわば中間段階であり、人の手が入らないことによりいろいろなことが起きるが、これをどうするかが重要であろう。

南の島の自然について

- ・ 鹿児島県は南北約 600 km に及び、渡瀬線より北が温帯、南が亜熱帯に位置し、多様な環境を有している。
- ・ 屋久島は、屋久杉に代表される森林の他、地形地質、滝、シャクナゲ、ヤクシマザルなどが特徴である。最近ではカヌーを楽しむ人もでてきた。
- ・ 奄美は徳之島の闘牛、サトウキビ畑、オオゴマダラ、ハブ、アマミノクロウサギ、亜熱帯林、マングローブ林、リュウキュウアカショウビン、海浜性植物など固有の文化と自然を有している。しかし、一方でマングースという外来生物の問題も大きい。
- ・ 屋久島の世界遺産効果を社会指標で見ると、人口が変化していないこと、観光客が約 3 倍になっていることがわかる。一方、奄美群島を見ると、人口は平成 2 年から平成 17 年にかけて 12% 減少しており、観光客数は昭和 50 年と平成 7 年ではほとんど変わっていない。
- ・ 日本の国土を考える時に、地図を逆にしてみると、新しい発見がある。日本はシベリア半島や朝鮮半島と距離が近く、日本海は湖のように見える。
- ・ 文藝春秋の 20 年 7 月号の特集で亡くなる 1 年前の司馬遼太郎の発言として、「国民の 80% が合意できることが一つだけある。自然をこれ以上壊さないことだ。それを日本人みんなして守っていくことにしたらどうだろう。」というのがある。
- ・ これからの時代は国際政治の中で、政策として自然を守っていくということももちろん重要

であるが、地域の人たちが自ら考えることが重要であると考えている。そのために、『屋久島の作法』、『鹿児島環境キーワード事典』、『鹿児島環境学』などの書籍を出版している。今後、毎年一冊ずつ新たな書籍を出版する予定である。

《質疑応答》

- (質問) 日本の絶滅危惧種、特にほ乳類は提示された資料より種数が多いのでは。
- (回答) データの出典年が今定かではないが、ほ乳類は絶滅危惧種を特定するのが困難である。しかし、2～3割であることは確かであろうと思う。
- (質問) 首都圏の人口について、韓国のソウルは近郊を含めると全国の約40%になり、東京より多いのではないか。
- (回答) 確かに途上国は首都圏に人口が集中している。韓国は途上国とはいえないが、ソウルは4割になっている。
- (質問) 愛知県は海岸王国だと思うが、自然海岸が少なく、どうすれば再生できるのか。
- (回答) 下には下があり、東京都は海岸の90%が立入り禁止となっている。人工化したものもとに戻らないが、重化学工業地帯を楽しい海岸に再生し、水質を向上させるなどの取組みはポルチモアなどで進められている。都市再生事業によって、楽しい生活ができる環境につくり変えていく、少し実験的に進めてみる、ということが前に進む一歩になるのではないか。
- (質問) 南の島に興味を持った動機を教えてください。
- (回答) 日本の世の中を変えるには、開発されていないところを見直すことによってヒントが得られるのではないかと考えた。奄美群島には80歳以上の高齢者が13,000人もいる。これは健康で生活してきた証でもある。東京的感覚とは離れたところに対し、別の見方をすると日本の未来が見えてくるのではないかと考えている。
- (質問) 里山問題やマングース問題などの二律背反的な問題にどう対応すればよいと考えておられるか。
- (回答) 里山問題とマングース問題は二律背反ではない。しかし、いずれも全体像を誰も考えていないのが現状である。これをどうするかはこれからの課題である。バランスのありようをどうするかということである。都市で原生的自然を保全することや標高2,000m^超地帯で大規模開発をするなどは考えられないことだろう。しかし、トキを絶滅させるようなことは起こってはいけないのではないかとすることは合意が得られるであろう。そうすると、中間地帯をどうするか、ということが課題になる。心を大らかにというのは今の時代の自然と人間を考える大きな流れである。COP10には8,000人も人々が世界からやってきて議論する。こうした中間地帯をどうするかについてCOP10を機会に考え、次の段階に進んでいくことが重要であると考えている。

以上